

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第730号 平成26年5月2日

子ども達を地域で守る（1）

「地域の教育力の低下」については、随分以前から指摘されて来ましたが、最近その事を実感するような出来事に遭遇しました。

それは先月のある日曜日の事でした。夜の6時頃、これから私の大好きな時代劇チャンネルを見ようとしていた矢先、外で子どもの泣き叫ぶ声が聞こえて来て、虐待でもされているのではないかと心配になり外に出て見ると、斜め向かいの家の前で5歳と2歳になる幼い男の子の兄弟が「ママー」「ママー」と母親を呼んで泣いているではありませんか。どうしたのかと聞いても泣くばかりで、ともかくも外にいたのでは風邪を引くからと我が家に連れて休ませる事にしました。

よくよく話を聞いてみると、留守番をしているようにいわれたという事で、虐待とは関係がない事が分かって少し安心しました。

1時間程して子ども達の両親が帰って来て事なきを得たのですが、母親の話によれば、お留守番が出来るといったので2人を置いて外出したとの事でした。上の子は5歳ですから、お留守番位出来ると思ったものの、だんだん暗くなると共に心細くなり、寂しさに耐えられなくなったのだらうと想像しています。

泣いたからといって声が届く筈はありませんが、それは大人の感覚で、子どもにしてみれば必死だったに違いありません（こういう場合、何故か「ママー！」としか叫ばないのは、男親としては少し釈然としませんが…）。

まあ、ここまでは良くある話なのですが、でも、私は全く別の意味で不安を感じました。それは、子どもたちの泣き声を聞いて様子を見に出て来た人は、私達夫婦以外にはいなかったという事です。窓を開けて様子を見ているという風もないのです。我が家の中にさえ子どもの声が届いたのですから、周りの家でも聞こえていた筈だと思うのですが、心配して様子を窺うという気配さえ全く感じられませんでした。少しい過ぎかも知れませんが、関わり合いになりたくないのも、扉を閉ざしていたという感じなのです。

「子どもを地域で守り、育てる」というのは教育施策の重要な柱の一つですが、これが実際に機能するためには、地域の人々が他人の子に対しても温かな目で見守り、必要な手を差し伸べようという積極的な意識が必要になってきます。しかし今回の出来事は、少子高齢化や過疎化が進展する中で地域の教育力が低下しているという、これまでの指摘を再確認する結果となってしまいました。（塾頭：吉田 洋一）